

史料紹介 十一月八日付羽柴秀吉朱印状について

中川 創喜

Introduction of historical records

—A Focus on HASHIBA Hideyoshi syuinjo (Vermilion-seal patents)—

NAKAGAWA Itsuki

本稿では、令和五年（二〇二三）度に岐阜県博物館が収集した羽柴秀吉朱印状について、次の通り紹介する。

羽柴秀吉朱印状

書状并尾州二

付置候者申様

一々聞届候、此方へ

相聞候も同前候、

誠入念切々

申越候段、感候、将

又東駒野城

去五日夜責崩之

由尤候、尚珍儀候者

可申越候也、

十一月八日 秀吉（朱印）

（天正十二年）

桑山修理亮殿

(1) 文書の内容

羽柴秀吉が桑山重晴に宛てた朱印状で、重晴からの報告に対する返書である。重晴の書状と尾張に派遣している者の報告を聞き届け、秀吉のもとに同様の情報が伝わっていることを報せている。重晴からの念入りな報告に感心し、十一月五日の夜に東駒野城を攻め崩したことはもつとよいことだと伝えている。

日付は十一月八日とあり、年次を欠くが、天正十二年（一五八四）の羽柴秀吉軍と織田信雄・徳川家康連合軍が対峙した小牧・長久手の戦いに関連する文書である。この戦いを契機として、秀吉は発給文書に朱印を本格的に使用し始め、文書様式の薄礼化・尊大化が進んだことが指摘されている¹⁾。その背景として、十月月上旬に秀吉が五位少将に叙任されたこと、対信雄・家康戦を優位に進めていたことが挙げられている。本文書も、「御内書」様式の書留文言の「候也」を使用し、「秀吉」の署名に朱印を捺す、比較的薄礼な文書様式である。

書中の東駒野城については、詳細な場所を特定できないが、美濃国石津郡にあつた駒野城（海津市南濃町）の周辺に所在していたと思われる。小牧・長久手の戦いにおいて、駒野を領していた高木権右衛門貞利らの一族は、織田信雄に属した²⁾。東駒野城も高木氏の軍勢が守備していたものと推測される。

宛名の桑山重晴³⁾は、大永四年（一五二四）尾張国の生まれ。はじめ秀吉に仕え、のちに秀吉の弟・秀長に仕えた人物である。但馬国竹田城に在城し、知行一万石を領し、天正十一年には、賤ヶ岳の戦いで戦功を上げる。天正十三年頃に秀長の城代として、紀伊国和歌山に入部し、天正十九年頃、知行二万石、のちに和泉国のうち一万石を加増され三万石を領した。秀長死後、秀長の後継・豊臣秀保に仕えたが、秀保が文禄四年（一五九五）に死去すると秀吉の直臣大名化する。初の名は重勝。官職名は修理進、修理亮、修理大夫、治部卿法印と変遷し、入道後は果法院宗栄を称する。

重晴については、賤ヶ岳の戦いや紀州での活動が知られているが、小牧・長久手の戦いにおける動向はあまり知られていない。その点で、南濃地域での戦いに従軍し、秀吉へ

現地の情報を報告していたことを示す本文書の存在は興味深い。

なお、本文書は静岡県熱海市の伊藤長太郎氏の旧蔵史料である。同家の史料については、昭和六十一年（一九八六）七月四日に東京大学史料編纂所が調査撮影を行っており、その際撮影された画像から、本文書が伊藤家旧蔵史料と同一であることが確認できる。『東京大学史料編纂所報』によると、昭和六十一年調査当時、本文書は他の古文書七点・花押七十二点とともに屏風一双に表装されていた。屏風は、煙草製造業者で葉問屋を兼業した市村喜兵衛が、江戸時代末に京都で入手したものを、市村家と姻戚であった伊藤家が譲り受けたという。

伊藤家の手を離れた後の来歴は不明であるが、現状は掛軸に表装されている。表装や軸箱は新しく、箱書もない。法量（本紙）は縦一六・六cm×横四〇・八cm。本紙は切断され表装されているが、下部に折り目が残っており、もとは折紙であったことがわかる。本文三行目と宛名の上部に一部欠損が見られるが、これは史料編纂所撮影の画像でも確認できたため、本紙部分は昭和六十一年調査時点とほぼ同じ状態であるといえる。

(2) 東駒野城落城に関する関連史料

次に、本文書に登場する東駒野城の落城について、関連史料を確認しておきたい。

小牧・長久手の戦いは、天正十二年三月から十一月にかけて約八ヶ月続いた¹⁰。四月九日、長久手の戦闘では秀吉方の池田恒興・元助父子や森長可が徳川軍に敗れ、戦死している。その後、秀吉は尾張西部に戦いの場を移し、五月には加賀野井城・奥城を落とす。六月に竹ヶ鼻城が落城すると、秀吉は高木氏の守る駒野城周辺に軍勢を派遣し、砦を築いている¹¹。

これに対し、信雄は高木一族に宛てて七月晦日付の判物で、駒野城の普請に精を入れ、敵方（秀吉方）の様子を伝えるように命じている¹²。さらに、八月中旬に駒野城の加勢として、伊勢国宝泉寺（法泉寺）の空明・太田金七郎を派遣している¹³。

十月下旬に秀吉が北伊勢を攻めるため軍を進めると、信雄は駒野城の高木一族と援軍と

して派遣している宝泉寺（法泉寺）空明に対し、秀吉の北伊勢出陣を伝え、油断の無いよう用心を求めている¹⁴。

さて、本文書でも触れられているように、駒野へは秀吉方による攻勢がかけられ、十一月五日夜東駒野城は落城する。この東駒野城での戦いに関しては、次の関連史料がある。

(史料1)

土倉四郎兵衛尉宛羽柴秀吉朱印状¹⁵

〔大阪城天守閣所蔵〕

書状令披見候、仍去五日ニ東駒野取詰、即時乗崩少々討捕、其外河ニて相果候由得心候、尤候、将亦此表事、弥任分候間、可心安候、委細先書申候間、不能再筆候也、

十一月七日 秀吉（朱印）

土倉四郎兵衛尉殿

(史料2)

田中真吉宛戸田勝隆書状¹⁶

〔林原美術館所蔵〕

御状拝見申候、仍殿様へ為御音信雁老ツ則披露仕候処、御祝着之由、以直札被仰遣候、随而東駒野事申上候処、御祝着之由、為我等心得可申由被仰出候、将亦我等方へも為音信鴨老ツ送給候、忝令存候、以面可申入候、此表之儀、御取出城ひゑ・鳥山・羽津・泊・河尻・萩原・桑部など被成御拵、早出来候、然者五三日中二被明御殿、可為御帰陣候、又其元之事無異儀之由尤之儀候、於様子者可御心易候、尚々自是可申入候間、不能具候、恐々謹

言

戸田三郎四郎

十一月九日 勝隆 (花押)

田中真吉殿

御返報

史料1は、羽柴秀吉から池田照政の家臣・土倉四郎兵衛尉に宛てた朱印状で、十一月五日の東駒野の戦闘についての報告に対する返書である。東駒野での戦いでは、守勢のうち討ちとられた者のほかに、「河」（津屋川あるいは掛斐川か）で命果てた者もいたことがわかる。

史料2は、秀吉の家臣・戸田勝隆が、今尾（海津市平田町）周辺の領主で池田家臣の田中真吉に宛てた書状である。書中に「東駒野事申上候処、御祝着之由、為我等心得可申由被仰出候」とあり、真吉から勝隆へ東駒野での戦闘の様子が伝えられ、秀吉のもとへ上申されたことがわかる。書状の後半では、北伊勢の戦況を伝え、数日中には隙が明けて帰陣する予定と報せている。

一連の史料から、東駒野城での戦闘には桑山重晴や池田勢が参加し、同城の落城については、諸将から秀吉のもとへ報告が届けられた様子がわかる。

なお、東駒野落城から一週間後の十一月十二日、秀吉と織田信雄の間で講和が成立する。

結語

以上、天正十二年の小牧・長久手の戦いの講和間近に発給された羽柴秀吉朱印状について紹介した。本文書は、新出史料ではないが、『岐阜県史』や『豊臣秀吉文書集』などの史料集に収録されていない未活字史料である¹⁷。また、東駒野城での戦闘について記す史料も、管見の限り本文書と**史料1・2**の三例のみであり、今後の調査研究が待たれる。

本史料紹介が、地域史研究に少しでも役立つことを願って擲筆する。

註

1 小林清治『秀吉権力の形成』（東京大学出版会、一九九四年）、播磨良紀「秀吉文書と戦争―小牧・長久手の戦いを中心に―」（藤田達成編『小牧・長久手の戦いの構造戦場論 上』岩田書院、二〇〇六年）。

2 東駒野を「岐阜県海津郡海津町」（現・海津市海津町）とする『大阪城天守閣紀要』（第二十九号、二〇〇一年）と、東駒野城を「現南濃町」（現・海津市南濃町）とする「岐阜県関係日本史論文紹介（五）」（『岐阜県歴史資料館報』第十三号、一九九〇年）、早野博之「岐阜県地方史研究の動向」『信濃』第四十二巻第六号、一九九〇年）がある。東駒野（城）について、前者は近世の東駒野村（海津市海津町）、後者は駒野城（海津市南濃町）の周辺と想定しているものと思われる。本文書や関連史料から場所の断定が困難なため、本稿では保留しておく。なお、海津市南濃町駒野の小字名に「東廓」がある（『角川日本地名大辞典 21 岐阜県』角川書店、一九九一年）。また、典拠不明ながら、『小牧・長久手の戦いと海津』（海津市歴史民俗資料館、二〇〇九年）では、東駒野城を「高木貞利の居城であった」とする。

3 織豊期の高木氏については、河井信幸「美濃国武将 高木権右衛門信長に鯉を 秀吉に鶴を 家康に敷物を贈った男」（『岐阜県歴史資料館報』第三十二号、二〇〇九年）や山田昭彦「織豊期・西美濃高木氏の動向―『高木家文書』を中心として―」（『岐阜県博物館調査研究報告』第三十七号、二〇一七年）を、小牧・長久手の戦いにおける高木氏の動向については、『南濃町史 通史編』（岐阜県海津郡南濃町、一九八二年）を参照のこと。

4 桑山重晴については、高柳光壽・松平年一『戦国人名辞典 増訂版』（吉川弘文館、一九七三年）、『国史大辞典 第四巻』（吉川弘文館、一九八四年）、播磨良紀「桑山重晴について」（『和歌山市史研究』第十二号、一九八四年）、同「再び桑山重晴について」（『和歌山市史研究』第十五号、一九八七年）を参照した。

- 5 桑山重晴が秀長の家臣となった時期について、小竹文生氏は、「重晴は少なくとも天正十年頃には秀長の家臣（もしくは与力）だった」とする（但馬・播磨領有期の羽柴秀長）『駒澤大学史学論集』第二十八号、一九九八年）。
- 6 天正十二年十一月時点で、「重勝」「重晴」いずれの諱を使用していたか判然としなため、本稿では表記を「重晴」に統一した。
- 7 「寛永諸家系図伝」の桑山の項には、「ときに秀長濃州妹尾の城をかこみせむ。こゝにをひて重晴先登となる。」とあり、小牧・長久手の戦いの関するものとも考えられるが、詳細は不明（『寛永諸家系図伝 第十一』続群書類従完成会、一九八七年）。
- 8 探訪マイクロフィルムをスキヤンした画像（書目 ID 00005651・請求記号 1986-084）を東京大学史料編纂所図書室端末（データベース「Hi-CAT Plus」）で確認した。
- 9 「探訪調査報告十一・伊藤長太郎氏所蔵史料の調査・撮影」（『東京大学史料編纂所報』第二十二号、一九八八年）。
- 10 小牧・長久手の戦いにおける一連の動向は、谷口史「小牧・長久手の戦いから見た大規模戦争の創出」（藤田達成編『小牧・長久手の戦いの構造 戦場論 上』岩田書院、二〇〇六年）、『愛知県史 通史編三 中世・織豊』（愛知県、二〇一八年）などに詳しい。
- 11 佐与六入他宛羽柴秀吉朱印状「岐阜市歴史博物館所蔵」（名古屋市博物館編『豊臣秀吉文書集 一』二〇一六年、一一一三五号）、木曾伊予守宛羽柴秀吉朱印状「佐藤行信氏所蔵文書 東大史影写（同、一一一四号）。
- 12 高木権右衛門尉他三名宛織田信雄判物「高木文書」（『愛知県史 資料編 12 織豊2』（愛知県、二〇〇七年、八八一号、以下『愛知県史 資料編』と略す）。
- 13 高木権右衛門尉他宛織田信雄書状「法泉寺文書」（『愛知県史 資料編』八八八号）。
- 14 宝泉寺他四名宛織田信雄判物「高木文書」（『愛知県史 資料編』九一七号）。
- 15 『大阪城天守閣紀要』（前掲註2）。
- 16 「古判手鑑」所収（『令和二年度特別展 光秀が駆けぬけた戦国の岐阜』岐阜県博物館、二〇二二年）。なお、原文画像により釈文を改めた。
- 17 なお、本文書の内容は、『東京大学史料編纂所報』（前掲註9）を引用する形で、『岐阜県歴史資料館報』（前掲註2）、早野氏論考（前掲註2）、『織田信長と岐阜』（岐阜県歴史資料館、一九九六年）で紹介されている。



十一月八日付羽柴秀吉朱印状